

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える
本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人
まで二七〇人の古典的かつ伝統的
な名句一〇〇〇を収め、豊かな実
作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典
結社や傾向にとらわれず現代の代
表的な俳人五〇五人の代表作一四
六八句を収め、公平に客観的に鑑
賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典
日本の季節にまつわる言葉をも
ツグ・不快指数などまで収録し、
春夏秋冬の四季に分類した。気象
学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典
古典俳句に使われる季語は今日で
は意味や表記が難解で正しい解釈
や鑑賞ができない。本書はそれら
の季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 国語学協会
B5 一〇〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編
A5 六〇〇〇円

国語慣用句辞典 白石大二編
B6 二〇〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編
B6 三〇〇〇円

日本語源辞典 堀井幸夫他編
B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編
B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 幸雄編
B6 三〇〇〇円

隠語辞典 榎垣 実美編
B6 二〇〇〇円

近世上方語辞典 前田 眞樹編
A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井 赤穂編
B6 二〇〇〇円

明治新語俗語辞典 榎島忠夫他編
B6 三〇〇〇円

難訓辞典 中山 幸雄編
B6 三〇〇〇円

名乗辞典 榎木 良造編
B6 一五〇〇円

名数数詞辞典 森 謙彦編
B6 四〇〇〇円

あいさつ語辞典 奥山 益朗編
B6 二〇〇〇円

新版 こことば遊び辞典 鈴木 繁三編
B6 五八〇〇円

類語辞典 鈴木 広田編
B6 二八〇〇円

類義語辞典 徳川 宣彦編
B6 三〇〇〇円

表現類語辞典 藤原 亨一他編
B6 四八〇〇円

新版 文章表現辞典 神島 村松編
B6 二九〇〇円

連句 第24号 季刊



「おくのほそ道」の正花（南柏雜記 22）…………… 1
 「あたまうつな」の見立て替え……………佐藤廣幸…………… 2
 「鳶の羽も」の巻 鑑賞（Ⅲ）……………東 明雅…………… 4
 沙羅の会 歌仙二巻……………捌・文 東 明雅・式田和子…………… 8
 「蓑虫」付勝練習二十韻…………… 10
 「新一夜四歌仙」……………文 草間時彦…………… 12

第二十八回 猫蓑会 二十韻七巻…………… 16
 捌 内田麻子・福井隆秀・米谷貞子・瀧川雅代
 金久保淑子・山崎一恵・若尾よしえ
 余興二十韻膝送り二巻 松とれて・七日粥
 文 秋元正江

電通連句部 残る紅葉……………捌 秋元正江・文 山口美恵…………… 21
 柏連句会 二十韻四巻……………捌 東 明雅・秋元正江…………… 22
 福井隆秀・下鉢清子 文 下鉢清子
 四宮連句会 後の月……………捌・文 永島靖子…………… 24
 興流連句会 紫蘇の実……………捌 尾向閑堂・文 田原竹無斎…………… 25
 赤山連句会 酸漿市……………捌・文 二宮操…………… 26
 関口連句教室 歌仙 木守柿……………捌・文 下鉢清子…………… 27
 雁帛往来・連句会案内…………… 29

「おくのほそ道」の正花

南 柏 雜 記 22 雅

「おくのほそ道」の湯殿山のところは次のような文章がある。谷のかたはらに鍛冶小屋といふあり。（中略）岩に腰かけてしばし休らふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ば開けるあり、降り積む雪の下に埋もれて、春を忘れぬ。選桜の花の心わりなし。炎天の梅花ここにかをるがごとし。行尊僧正の歌のあはれもここに思ひ出でて、なほまさりておぼゆ。総じてこの山の微細、行者の法式として他言することを禁ず。よって筆をとどめてしるさず。右の一文を読んでほつと気が付いたことがある。湯殿山は秘密行法の山で、山上のことは一切口にしてはならぬといひながら、それを敢て守らず、山中の選桜のことを記したのは何故か。これは、この「おくのほそ道」一巻の中に何とかして正花を一つ入れたかった芭蕉の念願を示しているものではないか。

「おくのほそ道」は序・破の一段・破の二段・急という歌仙の四つの部分に分けて作られているというのが私の持論である。書き出しから遊行柳・殺生石あたりまでの関東が表、白河の関を越えて松島から平泉までが裏、尿前の関が

ら家・市振をへて全昌寺までが名残の表、越前へ入って汐越の松から大垣までが名残の裏と考えているが、この一篇の中で月花の句はどうなっているだろうか。門出の「弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月には有明にて光をさまれるものから」とあり、この文章の続きに「富士の峰巒かに見えて上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し」として、月も花も一緒に出ている。さらに裏の月は松島で出ているので、初折にあたる部分はこれで完全であろう。

名残の折で芭蕉が最も苦労したのは、名残の折の正花（句の花）をどのようにして出すかということであろう。旧暦の六月と言えば太陽暦では七月・八月の暑い盛りである。空想の花はもう出せないし、卯の花・紅粉の花・ねぶの花は咲いていても、それらは正花にはならない。それでやっと思つた選桜のことを山の定法を破ってまで出すということになるのである。そして、選桜とだけではなく、「花の心わりなし」と花の字をちゃんと使っている。選桜だけでは正花にならないからである。

名残の裏にもう一箇所、敦賀のところで名月が出ていて、これで二花四月になるが、月の句はもともと、面に一つずつあってよく、二花三月は最後の月を省略したもので、二花四月の歌仙例は外にも沢山ある。引き上げた句の花の定座を月で埋めたものと私は考える。

「あたまうつな」の見立て替え

佐藤 廣幸

蕉風連句の一句一句は完全に独立して、それぞれの句から喚起される実感の交響によって付句が微妙につながり、余情の流れが作り出す自然な付け運びが歌仙一卷を仕上げた。これが今日われわれがもつ芭蕉の連句への一般的認識であろう。この認識に私もおおむね賛成である。

ところが、芭蕉の連句とは凡てこうしたとどのつたものかといえそうも云えない。この枠におさまらないものがあることも否定できない。その実例が『続猿蓑』の「八九間」の巻の中にある次の三句の渡りである。この歌仙は蕉風の円熟期の芭蕉最晩年の元禄七年の作品であることを忘れてはならない。

笹の葉に小路埋ておもしろき

あたまうつなと門の書つけ

いつくへか後は沙汰なき甥坊主

沾圃

芭蕉

里圃

沾圃の打越の閑静な句から、芭蕉はその余情を汲みとり、風雅な隠者風の人物を思い浮べて、そんな人の住みそうな草庵のあるくぐり門に貼り付けてある「頭に御用心」という貼紙を付けた。次の里圃の付句は、芭蕉の前句を門の貼

紙と見たのではどうにも付けにくく、また三句目の転じも果せないで、芭蕉の前句を全く別の意味にとりかえることによって新しい展開をはかるように、前句の「見立て替え」を行った。換言すれば、前句の余情からではなく、前句の句意からの係わりに比重を置いた「句意付」によりこの場を処理しようとした。即ち叔父の和尚の厳しい修業に堪えかねた甥の見習僧が、叔父に「頭を叩くのはやめて貰いたい」と書き置きを門にのこして叔父の寺を飛び出して行衛をくりましたと、解さねばならぬ様なドラマチックな付句とした。この三句の渡りは、こう解釈しなければ、その脈絡を辿ることはできない。作品を面白くするため、恣意にこう解釈したのではなく、その原因は既に制作の際の作者の意図にあったとしなければならぬ。この三句の製作過程を追体験することによって、里圃は三句目の転じを行うために、意識的に前句の見立て替えを行って、こう句作りしたと推察できる。後の鑑賞者が、故意に前句の句意を改変して、こう解釈したのでないことは明白である。里圃はこの場合、前句の余情を汲みとり、おだやかな付け方にしようとして試みたが、うまく三句の転じも出来ず困り果てて、前句を見立て替えて、その「句意付」に賭けた句作りをし

たのであろう。そこに注目した太田水穂（一八七六一—一九五五）は、その著『芭蕉連句の根本解説』（昭和五年刊）の中で、この付句を次のように評している。「はたらきのある附である。芭蕉が手をとって附けてくれたのではなからうか。こゝには芭蕉の手の臭いが可なり濃く出てる。」この付句に芭蕉が手を加えたかどうかは別として、前句を見立て替えて、三句目の転じを行い、新局面をひらいた工夫をほめて、水穂は「はたらきのある附」と評したのであろう。

「あたまうつな」という芭蕉の語句は、打越の句に付けたときは「Watch your head」（「頭をぶつけないように気をつけろ」）という「注意書き」であったが、次の里圃の付句になると、「Don't beat on the head」（「頭を叩くな」）という「抗議文」に意味が変えられて付けられたと見做さなければならぬ。このように里圃は、芭蕉の前句の句意を翻えして、三句目の転じを行ったのである。沾圃・芭蕉・里圃と続く、この三句の渡りは、芭蕉の前句の「見立て替え」なしには、こうはおさまらなかつたように思われる。

東明雅先生の『連句辞典』により、「見立て替え」を確かめてみると、次のように解説されている。

打越の句に対して付けられた前句の趣向を、付句を付けるときに別の意味に解釈すること。主に談林俳諧で用いられた手法で、一句一句の独自性や三句の渡りを重んじる蕉風連句では、前句の解釈可能な範囲内で行われる。

奇抜で極端な曲解をしたり、好んで用いるということはない。

蕉風の連句では、こうした「見立て替え」による三句目の転じを、時として行うことが是認されていたようで、芭蕉の連句を凡て、「余情付」で解釈し、鑑賞しようとする、画一的な態度は改めなければならない。現にここに挙げた『続猿蓑』の実例にしても、また初期の『冬の日』や『曠野』や『ひさご』の作品にもその実例がある。だから明雅先生も『連句辞典』の「句意付」の項で、「蕉風連句もまた前句の意味を十分に汲み取って付けるものであるから、句意付の手法が皆無というわけではない」と、ことわっていられるのである。

最後に、大正・昭和初期の連句及びその史的研究に大きな足跡をのこした費川他石（一八六八一—一九三五）が、蕉風連句の「見立て替え」について述べた所見を紹介しておこう。他石は「見立て替え」の例として、『続猿蓑』のこの三句の渡りをあげて次の様に解説している。

この三句の中の「あたま打つな」の句は、低い軒を注意するための貼札なのであります。それを「何處へか」の句を付ける場合に於ては、之を師の坊の烈しい警策に堪へられずして逃げ出した甥の小坊主の悪戯の貼札也と解するのであります。即ち、「あたま打つな」の解釈を両様にいたすのであります。

他石は「見立て替え」が果して、蕉風附方の一として準據すべきものかどうかという点については、自分としては大いに躊躇するところである。なぜなれば、連句の一句一句がかような不自然な進展をする附方は、蕉風開眼以後の芭蕉の作品には殆んど無いからである。そして芭蕉の説話を記述した『三冊子』や『去来抄』を見ても、「見立て替え」についての説示は遂に見出し得なかつた。ただ一つ『去来抄』に次の様な記述があつた。

「鶯の羽も」の巻 鑑賞(Ⅲ)

東 明 雅

去来曰。附句は何事なくさらさらと聞ゆるをよしとす。巻をよむに思案工夫して附句を聞むは苦しき事也。

他石はこの去来の言を「見立て替え」を否定する詞と考へてよいと述べ、蕉風の「見立て替え」による解し方、附け方に深い疑念を投げかけている。昭和初期の連句研究の先駆者、費川他石の言をここに紹介した。この見解は、昭和五年刊行の、増田龍雨・費川他石著『連句作法・連句私解』と題する単行本の後者の記述の中に見出される。

6

まいら戸に鶯這かゝる宵の月

人にもくれず名物の梨

去来

(現代語訳) まいら戸に、軒の鶯が這いかかつて、夕月に照らされているこの邸には、近在に知られた名物の梨があるのに、主人は人に与えようともしない。

(付心) 起情の句、起情とは、人情無の前句から、特別な感情をひき出して、それに叶った人情の句を付けること

であるが、この付合は、荒れた邸を照らす宵の月から、そこに棲む人物をもって付けたのである。

「徒然草」の面影付けであるという説については後述。

(付味) まいら戸と名物の梨は位の付けである。位とは前句にある事物と付句にある事物の品位がよく相応することである。さらに、宵の月と名物の梨は移りがよく、頼原退蔵氏はこれを句の感合と言っている。(日本古典読本「芭蕉」)

(転じ) 人情無の句から人情の句へと転じ、特異な人物

の性格の一端を描写して、作品に深みを加えている。

(補説) この人物については、①片意地者・変屈な人・奇癖の人・狷介な人、②吝嗇な人、③世に拗ね隠れ住む人・孤高な人品骨柄の人と評価が分かれている。右の三説のうち、②の吝嗇のみを取り上げた場合は、前句の位と合わない。また③の主人公を讚美するかの如き気分も、「人にもくれず……」という、いささか非難・批判めいた口吻を無視するものとなる。③の説は、次の史邦の付句を保つてはじめて納得されることとなるので、いわば史邦は「人にもくれず」を見立替えていると考えるべきであろう。それ故、表現はいろいろあると考えられるが、①の説の中のどれかに当ると考える。そして、吝嗇という要素もいささか裏面にはあつてもよいと思う。

この句は「徒然草」の面影と見る説が古来有力である。神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。……(中略)……かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましと覚えしか (第十一一段)

徒然草は元禄のこの頃、大変愛読された本であり、その中でもこの十一段は特に有名な段であるから、去来の脳裏のどこかにこれがあつて、自然に出たものであろうか。面影とは、古事や古歌などを使って付ける場合、それをはっ

きりと表面には出さず、おぼろ気に表現して、しかも読む人にすぐそれと感ぜさせる付け方である。

これで六句までが終つた。発句から六句までを表六句と言ひ、一卷の序・破・急の序にあたる部分で、穩かに進行させ、神祇・釈教・恋・無常・述懐・懐旧・病態・地名・人名などは出さないことになっている。この巻は右にのべるような嫌忌のものは何も出されていない。極めて穩かであるとともに、変化に富み、理想的に進行している。

7

人にもくれず名物の梨

かきなぐる墨絵おかしく秋暮て

史邦

(秋。秋暮て。人情目)

(現代語訳) 我が家の名物の梨を人に頒け与えることもなく、ただ墨絵を書きなぐって楽しんでるうちに、今年秋も暮れて行く。

(付心) 其人の付。前句の人物の境涯・心境を述べたもの。(付味) 名物の梨と墨絵とは位の付。

(転じ) 打越の人情無から一転して、風雅の人を描き出した。補説参照。

(補説) 同じ「徒然草」に次の一段がある。

「真乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。いもがしらといふ物をこのみて、おほくくひけり。談義の座にても、おほきなる鉢にうづたかくもりて、ひざもとにおきつ、くひながら文をもよみけり。わづらふ事

あるには、七日二七日など療治とて籠居て、思ふやうに
よきいもがしらをえらびて、ことにおほく食て、万の病
をいやしけり。人にくはする事なし。たゞひとりのみぞ
くひける。(同書六十段)

この段の存在を指摘したのは浅野信氏の、「七部集連句
猿蓑注釈」がはじめてで、阿部正美氏も「芭蕉連句抄第八
篇」に引用している。但し、二人ともこの段を、第十一
段と同じように、前句の説明の時、引用している。即ち、去
来が前句を作った時、この徒然草の二つの段が彼の脳裏に
浮かび、それを面影にして作句したというのである。一応
尤もであるが、私は去来は先にあげた第十一段を面影にし
て作り、史邦はさらに第六十段を加え、いわば見立替えに
して、この句を作ったと見る方がおもしろいと思う。

さすれば、打越と前句では、鶯の這いかかるまいら戸の
中に住むやや吝嗇な変屈な人を描き、前句とこの付句とで
は、墨絵に耽って、名物の梨を人にやろうとも気がつか
ない「世をかくろく思ひたる曲者にて、万自由にして、大方
人にしたがふといふ事なし」(「同書」六十段)という人を
描いたと見る方が、変化があってもおもしろいのである。特
にこの打越・前句・付句の三句のわたりについて、鈴木景
山の「猿蓑四歌仙解」などは、前句を中心に、(輪廻とも
言う。打越が同意・同趣になる事をいう)となっていて、と
指摘している程であるから、この人物の見立替えはやはり
意図して行なわれたものと見るべきであろう。

そう言えば前句の「人にもくれず」は、打越と付いた場

くもりて、ひざもとにおきつゝ、くひながら文をもよみけ
り」という面影にも叶うものであろう。

8

かきながる墨絵おかしく秋暮て

はきごころよきめりやすの足袋

(雑。人情自)

凡兆

(現代語訳) 墨絵をおもしろく描きすさぶうちに、いつ
しか秋も暮れたが、履いているメリヤスの足袋の履き心地
が何とも言えず快い。

(付心) 其人の付け。前句の人物の感慨を示したもの。

(付味) 自由奔放に描きちらす墨絵のおもしろさと、伸
縮自在なメリヤスの足袋(靴下)を履いた快さとが通いあう。

(転じ) このところの三句の渡り(打越・前句・付句の
関係)については、宮本三郎氏の「蕉風連句手法の一考察」
(「蕉風俳諧論考」所載)の研究がある。それによれば、
宮本氏もこの三句に変化なく停滞気味な点を肯定しておら
れるようであるが、打越は名物の梨を他人にくれないとい
うところに、自他半か、あるいは他の句と考えられ、前句
・付句がともにはっきりした人情自の句であるのとは、形
の上でも一応変化が付けられていると見るべきである。

(補説) めりやすの足袋については、「壘道」第五号に、
佐藤廣幸氏の「めりやすの足袋——七部集連句覚書」の一
文があり、その中で氏は、めりやすの特質・日本への伝来
、語源について詳細な研究を発表され、

合は「人にもくれず」と同じ意と解されるが、この付句と付
いた場合は「自分も食べないし、人にも与えない」という
意にしているようである。これも見立替えを助ける方法で
あった。かくて、ここでの主人公は、吝嗇の気を全くはな
れ、第六十段に

「とき、非時も人にひとしく定てくはず、わがくひたき
時、夜なかにも晝にも食て、ねぶたければ昼もかけこも
りて、いかなる大事あれども人のいふ事さゝいれず、日
さめぬれば幾夜もいねず、心をすましてうそぶきありき
など、尋常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろ
づゆるされけり。徳のいたれりけるにや」

と書かれた盛親僧都の面影を見ることができるのである。
かきながるとは、なぐり書きをする、書きちらすの意味
であるが、粗末に書くのではなく、興にまかせて書くこと
である。おのずから氣韻生動の有様が眼に浮かぶ。

墨絵は水墨画で、色彩を用いず、墨の濃淡だけで景色や
人物を描くもの、いわゆる文人画風なものであろう。

おかしくは、絵の出来ばえを指しているのではなく、書
く人自身がおもしろいと感ずるのである。

秋暮ては秋も終り方になったことを指す。また、前句と
の関係で見ると、名物の梨は、打越と前句とでは、邸の内
に枝もたわわになっている景をしのばせるが、前句と付句
との場合は、室内、卓上に籠か菓子盆などに盛ってある梨
の実と見る方が変化があってもおもしろいし、その方がさき
の盛親僧都の「談義の座にても、おほきなる鉢にうづたか

英国でメリヤス機械が完成したのはエリザベス王朝の
一五八九年で、我が国の豊臣秀吉が天下を統一した前年
に当る。ウィリアム・リー(William Lee)という牧師
がこの機械を發明した。これが今日のコトン式靴下編機
の元祖である。「猿蓑」の刊行された元禄四年(一六九
一)から約百年前のことである。「猿蓑」の「めりやす
の足袋」が手編みであったか、機械編みであったかの実
証は困難であるが、メリヤス機械發明から、およそ一世
期を経たことを考え合わせると、機械編みのめりやす
靴下が輸入されていたと見ても決して不都合ではない
と述べておられる。

延宝八年(一六八〇)刊の「洛陽集」に「唐人の古里寒
しめりやすの足袋」の句があり、同九年刊「西鶴大矢数」
にも「紅毛よりも帗織売、めりやすが脱れぬ事なら草履ぬ
げ」(第九)。「長崎下り住吉の浜、目瑙耶子をはいて蛤
剛踏れたり」(第十九)などの用例が見られる。おそらく
外国製の靴下そのままを「めりやすの足袋」あるいは「め
りやす」と呼び、貴重な舶来品として、富裕な人が用いた
ものであろう。当時としては、非常に目新しい用語であり、
また、外国の新しい文物に対するエキゾティズムという点
において、前句の墨絵と通うものがある。

因みに足袋は現在は冬の季語になっているが、江戸時代
後期に入ってからのもので、元禄のころはまだ季語として
用いられていない。

沙羅の会

歌仙二卷

昭和六十三年十一月十六日
於 京橋区民館

亥の子餅

東 明 雅 捌

逆茂木のこと

東 明 雅

京橋や亥の子の餅を売る老舗
行き交ふ人の冬めきし肩
サッカーのあぐる歓声響き来て
せがまれて取るあやとりの紐
玻璃戸越し梢にかかる三日の月
残る虫鳴く庭の片隅
醸したる葡萄酒金の杯に
海泡石のパイプくゆらせ
克蘭ケの米ぬ幸ひを看護婦と
長い人生ちよとずつこけ
十一面観世音負ふ大笑相
連の浮葉に月の小波
ひげのある鮎もどきなど皿にのせ
名なく家なくヒッピーののまま
猫又の至福千年棲むあき地
鋼の玉のうなる起重機
自転車のペダルも軽く花曇り
暖かな風頬をかすめる

千町 生雲丹の小さき壘が旅のつと
弘子 蛙言葉で詩を書いて逝く
麻子 智恵の輪のはづれぬままに抽出に
瑞枝 返還近き繁栄の島
杉亭 円高をいいことにして日本人
久美子 秘書といふ秘書みな美形なり
明雅 今晚は落ちてやる気の爪を塗る
枝 忍びあふ仲藪つ蚊が刺し
町 王宮の闇は何やら摩訶不思議
麻 王妃褒姒の豊饒の肌
町 芋畑小さな悪事月照らす
枝 さらさらさらと芒吹く風
亭 愚痴咄老七十の秋惜しむ
弘 ルッソーバりに描く幻想
美 古伊万里の壺を飾れるシャンゼリゼ
亭 穀雨なりけり朝からの降り
美 花の宮巫女は袴を胸高に
弘 ふらここ揺する兄と弟

麻 逆茂木とは、敵の侵入を防ぐため、とけのある枝を外の方へ向けて結んだ柵のことであるが、連句の座で互いに助けあって障書を取り除き、秀逸の句を続けることを言い、ことに人情の句を数句続けて面白味を増すように工夫することをいう。
枝 この巻、初折の恋が割合にあっさりとは済んでしまった。連衆には何か物足りない気分が残ったから、名残の折ではたっぷり恋句を楽しまうということで、結局、恋句が五句続くことになった。五句も恋句が続けるのは恋詰りと言って嫌うむきもないではないが、そんなものに拘泥してはいては一卷の新しいみ・おもしろさは求め得ない。ナオ六句目は他、七句目自、八句目自他半、九句目場、十句目他、中に場の句が入っている。純然たる逆茂木とは言えぬかも知れぬが、みな結構楽しんでいただいた。

紅葉散る

式田 和子 捌

六中観

式田和子

紅葉散りそめて京橋宝町
信号赤にふはり綿虫
魴鯉の髯をつかみて料るらん
一行の軸掛ける脇床
翼照らす月の小さくなりまさり
子を遊ばせる木の実転がし
音高くボージョレヌーボー栓を抜く
もうワンランク上と云ふギャル
靴下も洗ってくれる夫と添ひ
杭かくるほど汐の満ちきぬ
風化して面輪やさしき石仏
犀星の碑にふれて夏月
沙羅咲かせ浪人ひとり留守をもち
苦しい時に役にたつ秘書
直行のデズニールランドオプショナル
象牙のキユウで撞いた四つ玉
山彦を呼べば遙かに花霞
巢立ちの鳥のひたに鳴き居り

和子 春の日のガレージセル繁昌し
みづゑ 母が秘伝の常備薬服む
正江 得々と植木談義で煙に巻き
孝子 根雪がしみる過疎となる村
啓世 着任の先生若く丈高く
正雄 急に化粧の時の長びき
遊 殺したいほどに狂ひし魔の電話
ゑ BGMに喜多郎の曲
孝 真帆片帆染めて涼しき呉須の皿
雄 婆の仕草をまねるままごと
遊 うたたねに西瓜のやうな月がさし
江 前方後円ちっち蟬聞く
世 三宝に新絹巻きて供へけり
孝 駅に群れ居るボーイスカウト
遊 盲導犬寄り添ひて伏す瞳の静か
和 とく起きて逢ふ蜚鳥賊漁
世 吟醸酒ずんと据ゑたる花主
ゑ 庭下駄濡らしあたたかな雨

沙羅の会の捌当番が回ってまいりまして、「苦中楽有り」たいものと秘かに思いました。何しろ、連衆は「腹中書有」る方ばかりですから。
第三では、発句の「て」を嫌って魴鯉の髯をつかみて料るらん 正江と、「意中人有」る句が出まして、前途を楽観。
靴下も洗ってくれる夫と添ひ 孝子
こんちきしよう、と思いますが
杭かくるほど汐の満ちきぬ 正雄
ひたひたと穏やかに受けられ「忙中閑有り」。四つ玉の音が花の山彦と響きあい、根雪の村にも若い先生が赴任すれば、女心を啓世さんがしっかりつけられました。しかし、どう納めようかと思うところへメルヘンが出て、「死中活有り」。
うたたねに西瓜のやうな月がさし みづゑ
それからは、捌、花主はずんと気が大きくなり、「壺中天に有り」の境地に遊ばせていただきました。

養虫

付勝練習二十韻
東 明雅

投句締切
4月20日

- 五句目 心太芥子かかせてすすり込み 淳子
六句目 制服ぬいだ彼とくつろぐ よしえ
七句目
- 治定 さりげなくお守りだよと犬はりこ 元子
1 芝居めく恋の言葉を幼げに 哲
2 忘れじのゆく末までの初キス 弘次
3 耳もとにそのひとことをささやかれ 妙子
4 しなやかに眼鋭き獣なり 藍
5 身重妻つれて誇らし面映ゆし 達子
6 あれこれと言あげしては甘えをり うせい
7 紙反古に恋のひともじ散らし書き 鋭太郎
8 初恋の君と会ふ老い隠し得ず 千雪
9 ワープロで打たれた恋の定期便 良子
10 転動となりて不倫を精算し 淑子
11 九官鳥「愛してるワ」と折もよく あかり
12 九官鳥気にしふたりの習ひごと 淳子
13 綻びを繕ふ隙にぬすむキス 澄子
14 職場ではすれ違っても無視するの 澄子
(応募受付順)

1 制服を脱いだ彼との、ややぎこちない対応がしのばれてほほえましい。まだ、すれていない若い二人の関係が想像される。だが、「芝居めく恋の言葉」をもっと具体的に表現出来ないものか。2は「忘れじのゆく末まで」をそのまま用いてその点に新しみはないが、下五の「初キス」が利いている。「初キス」と「キスの味」と二つ出してあったが、それは断然、「初キス」の方であろう。制服を脱いだ彼と久しぶりにあって、キスをしてしびれたというのでは、あまり平凡である。3打越との変化に十分注意をして、豊富な内容を暗示的に出している。その点老巧と言えるであろう。ただ、この句はいわば出来すぎた句であるために、前句、ことに「制服」との間の余情が十分に生かされていないのではないか。その点、次の4は、「眼鋭き獣」というところに、年若い自衛隊員でも思わせるような体臭がムンムンとただよって来るように思われる。転じも十分であり、この句は傑作である。5これは一種の対付である。前句は恋人といる女性の心境を述べているのに対し、この付句では身重妻を連れだした男性の心境である。このような付句方は珍しいが、おもしろいし、第一、この句は外の景らしいところに打越からの変化があつてよろしい。このような所まで考えて付けたのならば、大したものである。6制服を脱いだ恋人に対し、女性が何やかやと甘えるというのは、あまりに一般的であり、これを詩にするためには、何か具体性・特殊性・意外性というようなものを加えなければ無理であろう。その点、もすこしお考えいただきたいと思

※う。7この句は情景がやや曖昧である。これは場の句であらうから、確かに打越からの転じはあり、また、恋の気分も何となく滞っているが、私にはこの句の本当の意味するところが理解できないのである。8はおもしろいが、内容がすこし豊富すぎるのではあるまいか。また、「老い隠し得ず」が前句の「くつろぐ」の感じにややそぐわないような感じがする。9ワープロで打たれた恋文というところに、前句の制服の余情が感じられ、その点はおもしろいと思った。また、打越からの転じも十分利いている。10は前句の事情を説明している。それは一応理が通っているが、理が通っているだけにおもしろくない。同じことを言うのでも、もすこし物を見る角度をかえるか、その事実の切り取り方を工夫するとか、表現を変えておもしろくするとかする必要がある。11この巻にはまだ動物の姿がなかった。次の12の方ならんで九官鳥が出て来たのにはびっくりした。鳥でありながら人語を話すこの鳥は、材料としてはおもしろく、また恋の雰囲気も持っている。11のこの句は人情なしい、12は自他半のつもりで出されたと思うので、打越の難はないけれども、九官鳥と言えは籠の鳥、室内で飼われることが多い。打越の心太がどうも室内の景らしく思われるので、何か打越から一続きのような感じがしなくてもいい。13もその点はやはり室内の景のようであるけれども、九官鳥みたいに印象の強い言葉がないから、その点はいいと思いうし、綻びを繕っている女性、たわむれてキスを盗む男性、いかにも前句の「くつろぐ」という余情が入っていてよい

と思う。14これも前句の事情の説明である。これも理が通っており、御尤と思うが、御尤と思うだけでおもしろくない。ただ、この句の御愛嬌は、表現に一工夫して独白体を採用しているところである。独白体(ひろく会話体)はうまく使うと一巻に大きな変化を与えてくれる有効な手段である。

さて治定された句については、投稿された下坂さんのおハガキをそのままここで紹介させていただくことにしよう。
二十韻「養虫」

付句

さりげなくお守りだよと犬張子 自他半

犬張子は昔新枕や産所に犬箱として使われたとか、そのとほけた愛らしさがとても大好きです。

制服のポケットから出した犬張子、きつと掌にのる様な小さなものだったでしょう。男性の内にひめられたやさしさ、心づかいを思いました。(下略)

この句は、表面的には愛とか恋とか、キラキラしたものは一切ないけれども、いかにもしんみりとした夫婦の愛情がうたわれている。現代恋句の佳作の一つとしてよいであろう。

尤も、原句の犬張子は打越の芥子に障るので、犬はりこと直させていただいた。

次はもちろん七・七の短句、雑でお願いたいが、恋はもうこの位にして、大きく転じていただきたい。

新一夜四歌仙

昭和六十三年九月二十九日
於 熱海サニーハイッ

秋の巻

とうがらし

うつくしや野分のおとのとうがらし
月待つばかり整へし膳
初獵の銃の手入れもねんごろに
畳の上にソファー並べて
チンリンと大名時計刻を告げ
坂の途中で漫画取り換へ

蕪村
正江
隆秀
時彦
千町
江

学校を終へて直ぐさま通ふ塾
祀巴と降りしきる雪
風邪召すな酒すぎますとふはり掛け
玉の井の女ちよつと受け口
紳士録五つさばよむ年の欄
草いきれして律荒れたり
月のもと蟬の寝言も時にもれ

秀
彦
町
江
秀
彦
町
江

冬の巻

枯野

蕭條として石に日の入る枯野かな
翅ゆっくりと開く冬蜂
家の者留守となつた静けさに
掛けし時計をひとり捻子巻く
短冊の月の句会に積まれをり
インタビュアーの爽やかな声

蕪村
千町
時彦
隆秀
正江
町

ブランチは露のロッジの庭に出て
いつか手と手が重なりてゐし
吉原のお職の齋の乱れ髪
泪つづりて水晶の玉
飼猫の他に野良猫五六匹
医師もビールでくつろぎの月
茴香の匂ひの中でごまかさ

彦
秀
町
江
秀
彦
町
江

春の巻

行く春や

行く春や同車の君のさざめごと
雌蝶雄蝶のもつれあふ昼
草に木に八十八夜雨降つて
轡を押して烟草いっ服
小道具はペーパームーンピンで止め
秋刀魚啜へてうづくまる猫

蕪村
隆秀
時彦
正江
千町
秀

人声がつゆけき路地に入り来たる
ざくろの絵付け筆をおかずに
新しき堂に詣づる浄瑠璃寺
連句病てふ病賢盲
つくづくとひとの女房うつくしき
泣きぬれし瞳のうるむ凍て月
曆売り釣銭わたす指の冷え

彦
秀
町
江
秀
彦
町
江

刺繍をする糸の溢れる

またしてもじゃれつく猫を叱りつけ
大町小町千町さまざま
現し世は是生滅法花吹雪
つちぐもりして駆けぬける子等

江
秀
彦
町
江

継子継母鉢かつぎ娘

パレットに赤の絵の具をたっぷりと
客に自慢のチーズフォンデュ
遠近の花いっせいに咲きそめし
鷹か鳩かとのどかなりけり

町
江
秀
彦
町
江

抱卵期雨戸を閉めることならず

国際電話劇なかばに
ドゥピングして無にしたる金メダル
古代の恋は木簡にあり
湖も山も越えなむひたぶるに
夜這ひうれしや待つてゐたのよ
いたこ巫女なにゆえ父の里訛
洋服ネクタイすでに喪の色
蕭々と雨の日統き月も出ぬ
齢重ねてそぞろ寒しや
奉書焼き鱈こんがり箸を取り
八雲旧居に松江大橋

秀
彦
町
江
秀
彦
町
江
彦
町
江

春愁もテムズ河の橋の上

切裂きジャック通り魔の刻
小面を付けたるままに抱かれて
とうとうたたり恋も終りぬ
越後屋の手代集ひし炭俵
円高差益株価暴騰
空港のカレーライスのうまきこと
熱砂の民のコーランと剣
土つんでそれが墓なり雀来る
桐一葉落ちまた一葉落つ
月の卓高麗焼の壺を置き
ルオーのピエロやや寒の貌

彦
秀
町
江
秀
彦
町
江
彦
町
江

金メダル掛け聞きし君が代

高空に輪を描きゐる鳩の群れ
家代々の糠みその味
花の宴自社宣伝を唄ひ込み
鞭で励まし乗りし若駒
鐵鬼岳の裾の山小舎万愚節
保父となりたる次男三男
のらくろ育ちアトム育ちと同居して
性の白書の売れて絶版
ハイレッグの水着ときどきゆるみがち
昔の女にフィアンセ紹介
降魔術練金術師で詐欺師なり
蕪村描ける夜色楼台
さかづきに月の光りの溢れつつ
紅葉見の苑ひまご供にし
おむかへを待つばかりだとちちろ虫
ホットケーキを食べし夢など

彦
秀
町
江
秀
彦
町
江
彦
町
江

戦友と久瀨を叙し別るるも

論語素読の声の高らか
下駄と靴片し片しで坊や佇つ
頬杖をつきささふ春眠
花巡り都踊りの棧敷にて
昼も闇けつつ霞濃くなる

秀
彦
町
江
秀
彦
町
江

秋風のブランコゆらすふたりして

文字読み難き蔵の古文書
あてむきの駄菓子子の玻璃の蓋とれば
くるりまるまる皿の飯蛸
明石から淡路へかけて花曇り
ながめてゐたり塗り終へし畦

彦
秀
町
江
秀
彦
町
江

初霜の今朝は晴れたる山河にて

廃線となる筑波鉄道
よいとまけししながら家を守りをり
薄氷割りてすすぎものする
散る花も宇治十帖の水の上
かぎりひのなか受けとめし穂

彦
秀
町
江
彦
町
江

夏の巻

ほととぎす

ほととぎす平安城を筋違に
いづれを見ても青き山垣
ニールックスニーカーはき通ふらん
コンピュータの占める卓上
月光を浴びて子供とぐうちよきまば
夜食のうどんあつあつにして

芦刈の疲れし腰をいたはりつ
女性専科で鳴らす写真家
港の灯またたいてをり目を閉ぢぬ
うしろから来てしかとかい抱く
警官の不祥事続く落し物
猫派犬派で人を分けたる
公民館芝居で僕は玉三郎
寒月のぼる坂の上から
炬燵にて石戦はしいつか更け
お残りひとつ食べる大福
花びらの曼陀羅図絵にふりかかり
うなりも高く蛇はたのしき

蕪村 時彦 隆秀 千町 正江 彦 江 町 秀 彦 町 江 秀 彦 町 江 彦 町 江 彦

※三年前である。それを彼は覚えていて、やることになった。始めは八月にという話だったが、暑い盛りには連句に限らず重い仕事はやりたくない。延期して貰って、九月二十六日と決った。

話をしているうちに、どうせなら蕪村の上を行くように、五人集って、五歌仙としようということになった。発句は蕪村から拝借をする。実際には、杉内さん不参加で四歌仙となつてしまつた。

福井隆秀さんと相談をしていると、一つ食い違いがあつた。福井さんは夕方六時ごろから始めましようと言つて、要するに、皆さん夜型なのである。ところが、私は徹底した朝型。平常は朝六時ごろから仕事を始める。その代り、夜は八時過ぎには寝てしまつて、中間の三時からとして貰つた。

四歌仙にどのくらいの時間がかかるかと問うのが問題だつた。一歌仙三時間、四つが並行して流れるのだから、六時間あればよいのではないか。予備を二時間か二時間と見て、七時間から八時間を考えれば間違いないあるまい。三時に始まれば、夕食を一時間としても十時か十一時には全巻が満了す

※お隣の正江さんが、私を横目でにらんで「お暇そうねえ」と皮肉をおっしゃつた。その通りだつた。

ところが、計算違いがあつた。八時間で終るとしていたのが、十時間たつぷりかかつた。四歌仙と一緒に終ると思つていたのが、早く終つた巻と、最後まで残つた巻とで、一時間以上も違つていた。早いのは十二時近くに終り、遅いのは一時ごろまでかかつた。私の脳細胞の活力は十一時ごろで切れていた。それは私ばかりでなく、他の三人もそうだつた。作句力ばかりでなく、注意力も緩慢になつて、式目の見落しが続出した。だから、この四歌仙の末尾に近い部分は、甚しく出来が悪い。

十一月に入つてから、私たちは集つて反省会をした。ご母堂の不幸で、その日参加出来なかつた杉内さんも来てくれて、局外者の立場から助言してくれた。あまりみつともないところは直してみたが、この程度でご勘辯を頂きたい。

私の付句で、ふざけ過ぎているのがあつた。これは、疲れてだらけた座を湧き立たせるためのもので、あえて、そのままにして置いた。その夜の雰囲気を残して置きた

かつたのである。

反省会では、執筆がいた方がよいという意見が出た。その通りだが、無理だと思つた。十時間も他人の句のアラ探しをしようという酔狂な人物が居る筈はない。

蕪村の場合、二歌仙が先行して、時間が剩つたので、もう一度二歌仙を巻いたらしいというのも、体験から気付いたことだつた。とにかく、始めての試みだからやつてみて気付いたことが多いのは当然である。

顔ぶれについては、いい線だつたと思つている。とにかく、一四四句の長丁場だ。余程芸達者な人でなければ持たない。四人なり、五人なりのうちに、一人劣つた人が交ると、全体の感興が損なつてしまう。その点、今回の皆さんは安心出来た。

先日、東明雅先生にお眼にかかつたら、一夜四歌仙のことに触れて

「あの顔ぶれで手ごたえがなかつたならば、いつでも手ごわい新ら手を差し向けます。いくらでも人がいます。」

とおっしゃつた。どうやら、先生は私を猫糞道場の道場破りとして見ていらつしやるらしい。

(終)

新一夜四歌仙の記

草間 時彦

蕪村の真似をして、一夜四歌仙をやつてみませんか、杉内さんに言ったのは二、※

遠足で歓声あがる遊園地

ストレイシープのままで中年

黒人のファッションモデルに魅入られて

男の契りあはれなりけり

邪な恋とは知れど神頼み

蠟燭の油のさあお立ち合ひ

水打つて仲見世通り夕支度

敬老バスは使はずに住む

斗酒もやめいまは小塚の寝待月

風一陣に蠟燭の弁

椎の実を手にあそぼせて牧師なり

木椅子作りに休暇過ごしつ

ワープの字が見つからず見つからず

煎じ薬の盆に置かるる

北陸の帳場格子のほのぐらし

出初めし芹を洗ふ山水

吟行のひと仰ぎをり花万朶

気球はっかり春風に浮く

町 秀 彦 江 町 秀 彦 江 町 秀 彦 町 江 秀 彦 町 江 彦

る。私の計算はそうだつた。そこで、考えたのは、その八時間の時間を脳細胞が新鮮で、活撥に活動するようにするにはどうすればよいかということである。相手の皆さんはお若いから、そのような心配はなさるまいが、私の場合、精神を集中出来る持続時間は三時間が精一杯である。それを過ぎると、思考能力がぐぐりと落ちてしまう。一夜四歌仙はそれでは困るので、マラソンのスタミナ配分に似た工夫を試みた。

付句を咄嗟に付けるのである。浮かんで来た句を付ける。考えて付けたら、理屈で付けたりはしない。そうすると、時間が刺る。その刺つた時間は、何も考えずに頭の裡をからっぽにする。脳細胞を休息させるのである。又、ときどき立上つてペランダに出て、海を眺めたりする。八時間、坐りつづけではどんな強健な人でも、くたびれるに決つてゐる。

膝送りの連句はそれでよいのだと思う。付句と付句との間が、休息なのである。その休息をスタミナ蓄積に当てるのが、私の作戦だつた。それは成功した。付句が楽々と浮んで来た。最初の予定の八時間は、頭が冴えていた。※

